

フランスにおけるクィアマイグレーションと「黒人 LGBT」の日常実践

—サハラ以南アフリカ諸国出身者を対象に—

Us, being Black and LGBT through everyday practice:

A case study of ‘queer migration’ towards France from Sub-Saharan Africa

大学院人間文化創成科学研究科

ジェンダー社会科学専攻 M2 永井 萌子

1. 要約

本研究は、サハラ以南アフリカ諸国出身の LGBT 難民がホスト社会であるフランスにおいて、いかに彼らが持つ黒人性や同性愛者性といった複数のマイノリティ性とともに、社会に統合されていき、時にはその社会制度のなかで彼らなりの「日常実践」をもって「抵抗」を可能としているのかを見ていくものである。

本研究における LGBT 難民とは、「LGBT¹」としての生活が困難なために出身地を離れ、フランスにたどり着いたものたちのことである。難民申請を始めると同時に、出身地ではなくホスト社会の一市民としての彼らの生活は始まる。他方で「LGBT」としての彼らは、「いかにアフリカ人であり続けながら、自らの同性愛を生きるのか」²を問い、ホスト社会のものでなく、フランスにいる「アフリカ人」としての自己を形成していく。支配文化に包摂されているからこそ生じる彼らの日常実践をみていくことで、近年急増している LGBT 難民の現実を、どのような支配文化が彼らの抱える問題を作り出し、またその問題はいかにして解決または改善の余地があるのかを考えていく。

This study will see how LGBT refugees, from francophone countries in Sub-Saharan Africa towards France, integrate into a host society with their multiple forms of minoritiness, and yet as de Certeau (1987) argued, how their everyday practices could leave them room to resist against the dominant culture while staying within its social structure.

In this paper, when I use the word, LGBT refugees, it refers specifically to the ones who had fled from their countries of origin because of social discrimination, oppression or persecution towards LGBTs, and set a destination on France, which happens to be their former colonizing nation. Once they start the claims as a refugee in France, their integration starts regardless of their intention. At the same time, asking themselves a question as ‘Africans’ in France, ‘how do I live my homosexuality, while remaining African?’, enables them to form identities in their own ways. Seeing their everyday practices, which could be visible only when being within the dominant culture, would allow to see:

what is this ‘dominant culture’ which marginalizes and burdens LGBT refugees, and how could I find solutions, if this exists, to make their situations better.

2. 現地調査期間

2019年7月30日～2019年10月8日

3. 調査背景

人々の移動をクィアな視点から見ていく研究を「クィアマイグレーション (QM) 研究」と呼ぶ (工藤, 2014)。同性愛解放運動とその起こりを同じくし、エイズパニックを通じて顕在化した同性愛者に対する社会的な差別構造を解明しようと発展していったレズビアン／ゲイスタディーズ (LGS) は、否定的で差別的に、時に社会病理として語られる同性愛の概念を書き変えることを第一の目的に、肯定的なアイデンティティを基礎にした自覚的な当事者像を作り出すことを目指す。

90年代に入ると、自覚的な同性愛者像が備えていた本質主義的な性質と、異性愛／同性愛の二項対立で語られるジェンダー・セクシュアリティ (SOGI) 概念に疑問を呈した研究者らが新たに「クィア理論」を提唱する。ここで目指されたのは本質主義的な見方を脱して SOGI 概念を捉え直すことであり、またそれによって見落とされてきた性の多様性を主張していくことであった。つまり QM 研究でいうクィアな視点とは、SOGI の社会的・文化的な差異への視線を失うことなく人々の移動を見ていこうとするその姿勢のことである。

Luibhéid (2008) が「クィアは市民であり、移民は異性愛者である」と揶揄したように、SOGI 研究における当事者は長い間移動することのない主体であった。80年代に入り地方から都市へと移動し「解放」される当事者像が論じられるようになってきたものの、依然として彼らが国境を超えることはなかった (Valentine & Binnie, 1999)。特定の国内で形成されているという事実を無視したがために、SOGI 概念はいつしか他の国家や地域に当てはめても同じように論じることができるといった誤った考え方を植え付けてしまった (Kaytal, 2002)。この問題は当事者へと向かう同性愛嫌悪 (homophobia) 感情にも言える。つまり「LGBT」を嫌悪する感情もまた、特定の場所における社会的・文化的・政治的な文脈を一切取り払った、単一の嫌悪感情によって支えられていることになってしまうのである (Thoreson, 2014)。

QM 研究において、国際的な移動が論じられるようになってからまだ 20 年足らずである。国家レベルの権力や、政治的意図、文化的差異を読み取っていく試みとしての QM 研究といっても、多くの研究は依然アメリカやイギリス、オーストラリアといった英語圏に留まっ

ている。コミュニティを包摂しているように見える「LGBT」文化の多くがアメリカに起源を持ち、実際に拡散されている現状を踏まえると、自身が持つクィアネス (queer-ness) をホスト社会のものへと統合しやすい場所が目的地として設定されることは自然とも言える。しかし社会的・政治的・歴史的な（時には権力関係によって人工的につくられた）近似性から、本人の意思を超えたところで目的地が設定されているケースがあることもまた事実である。その一例がフランス語圏アフリカ諸国からフランスにくる LGBT 難民たちである。

4. 調査目的

本研究の目的は、統計や数字、地図上の事実だけでは読み取ることのできない、彼らの日常実践を基にした QM 研究を行うことである。質的な方法を十分にとってきていないことは多数の先行研究でも指摘されている通りである。彼らのナラティブを実際に聞いていくことは、地図上の移動だけでは認識されることのない、身体が／を通じて感じ取られた居心地や、帰属意識、欲望、恐怖といった要素が、愛着をはじめとする個人と場所とのつながりや経験を見ていくことを可能にする (N. M. Lewis, 2014)。

セルトー (1987) は「これとってなにか自分に固有のもの」、言い換えれば「状況に左右されない独立性を保てるような基地」を持たない「弱者」が、「自律の条件が備わっていない」中で外部にある力を逆手にとって利用する方法を「戦術」と呼ぶ。彼らは「なにかうまいものがあれば『すかさず拾おう』と」待ち望むものたちであり、そこで獲得した一時的な「機会」をうまく使いながら、〈わたしたち〉を作り出していく主体なのである。よって、彼らを包摂し、そのために実践が自ずと抵抗となって現れるような「支配文化」について考えていくことで、それによって支配文化が持つ構図とそれが孕む問題点を明らかにしていきたい。以上から、質的な方法の重要性を認識した上で、実際にフランスにたどり着いたサハラ以南諸国出身の LGBT 難民および、アサイラムシーカーへの現地調査を行なう。

5. 調査方法

調査形態は大きく分けて二つある。一つは、市民団体が開催する集会 (permanance) への参加である。3月に行なった調査ですでに参加していた二つの団体を中心に、集会や団体のイベント等へ参加しながら団体の活動を見ていく。それと同時にそこで活動・参加するメンバーとの交流を進めていく。

二つ目は個人への聞き取り調査である。これについては団体のメンバーとの交流を重ねながら進めていく。協力者は必ずしもフランス語での会話ができるとは限らない。今回は協力者が希望する言語で聞き取りを行なっていくため、通訳が必要な場合は適時手配し、実現可能性がある場合に限り実際に始めることにした。その際通訳も協力者の情報を共有する

こととなるので、同じ団体で私と両者がすでに知り合っているメンバーに依頼し協力者が居心地の悪さを感じないような環境づくりを心がけた。調査の場所を設定する際は、プライバシーが確保できることを最優先とした。パリには個人で借りることのできる貸しスペースのような場所があまりないが、どの街区にも公園は複数あり比較的安易に誰もいない公園を使用することができた。そのため対個人の調査についてはひと気の少ない公園を予め複数把握しておき、当日他の利用者がいないところで行うことで聞き取り中のプライバシーを確保した。

6. 調査結果

フランスは夏季休暇中ということもあり、調査対象の ARDHIS は 8 月いっぱい活動休止であることは承知していた。しかし、そのしわよせが 9 月にきて申請者が増加したことにより、個別に機会を設ける以外には 3 月のように集会中にボランティアスタッフから話を聞くことはできなかった。集会以外にも申請者同士が交流するためのイベントが不定期にあるのだが、休暇明けは職場や学校によっては 9 月下旬、10 月頭にまで及ぶことがあるため、今回の滞在中は一度も開催されなかった。予定を変更せざるをえなくなってしまったため、知人等をたどり、もともとの調査対象だったアフリカの虹に加えて新たに 2 つの団体の集会に参加した。以下が今回の調査で関わった 4 つの市民団体である。

団体名	団体理念・活動
ARDHIS ³	LGBT 難民申請者とバイナショナルカップルへの支援。メンバーは全員フランス人のボランティアスタッフ。フランスおよびヨーロッパで LGBT 難民申請に関する活動を先導している団体の一つ。
Afrique Arc-en-Ciel	アフロ・カリビアンのための市民団体。黒人と同性愛が主要なテーマ。ここ数年は ARDHIS のスタッフがアフリカ出身者にここを紹介するというルートが確立しつつある。
Shams-France	MENA ⁴ 地域出身、もしくはその地域の LGBT への支援。難民の受け入れもしているがもとはそれを目的とした団体ではないため支援体制が整っているとはいえ、現在も模索中。
SIL ⁵	LGBTI コミュニティの国際的な連帯を目指す。現在は特にアフリカ諸国との連帯を中心に据えているため、アフリカの虹と協力関係にある。メンバーは 10 人足らず。

ライフストーリーの聞き取り調査は 4 人に対して行った。そのリストは以下の通りである。3 月にすでに調査の説明をして協力を依頼していた A から始めた。B は ARDHIS とアフリカの虹の参加メンバーであり、その関係で調査に協力してもらった。普段の会話はフラ

ンス語であるがライフストーリーはスス語で話したいということだったので、スス語が第一言語であるアフリカの虹のメンバーに通訳を依頼した。CはARDHISで申請手続きの支援をすでに受けており、9月の頭に初めてアフリカの虹に来た。彼の初日にはアフリカの虹の説明をしたり、その後も申請に関する会話をしたりと連絡を取り合っていたため協力してくれることになった。普段の会話はフランス語よりも英語を使っていたがプール語で話したいということだったので、Bの時のように通訳を他のメンバーにお願いした。Dはアフリカの虹の中でも3月より見知っていた数少ないメンバーの一人であり、今回の調査についても把握していたため協力してくれた。以下がライフストーリーを語ってくれた4人である。

	年齢	性自認	性的指向	出身地	言語／通訳	ステイタス
A	20代	男性	同性愛者	セネガル・ギニア ⁶	フランス語／無	今年10月に上告が受理
B	20代	男性	同性愛者	セネガル	スス語／有	CNDA ⁷
C	20代	男性	同性愛者	ギニア	プール語／有	CNDA
D	50代	男性	同性愛者	ガボン	フランス語	フランス人

3月にアフリカの虹の代表に調査の説明をした際は、彼がメンバーを紹介してくれ、彼らを中心に辿っていく予定であった。しかし彼自身が仕事や、アフリカの虹、他の複数の市民団体の活動とLGBTセンターのスタッフとしての仕事など多忙であったこと、そして、調査を進めていく中で紹介してもらいその日会った人と調査を始めていくことは、ライフストーリーの聞き取り調査を進めていく上ではむしろ困難になってしまうと感じたため、途中で彼とも話し合い予定を変更することにした。

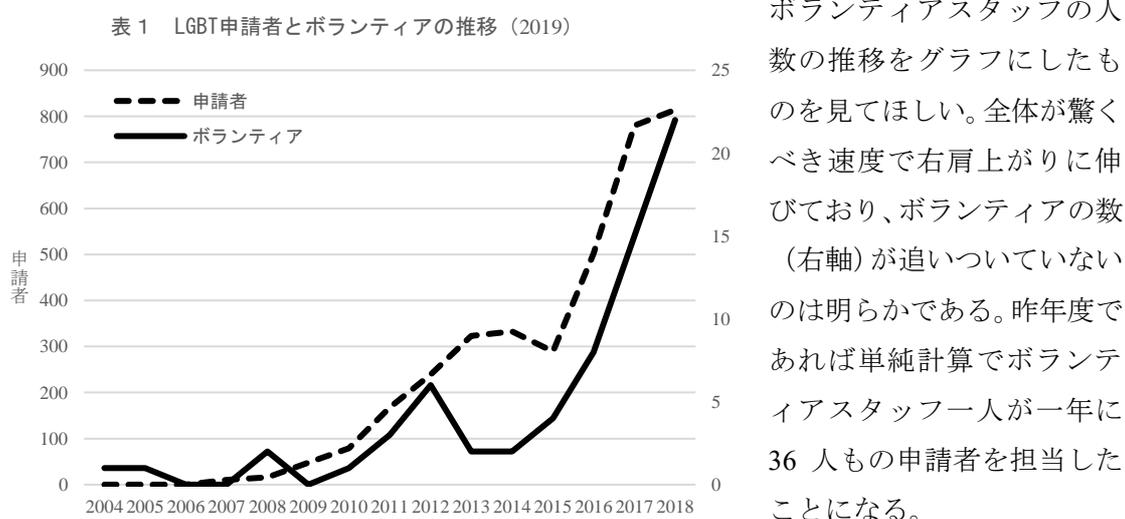
調査の反省点はいくつかある。一つは滞在期間の短さである。2ヶ月といっても集会は週末にしかない。それでも活動日以外であってもセンターで交流するなどして十分に関係性を築くことができたと感じたメンバーへは、上の4人以外にも複数人調査の協力を依頼していた。しかし実際には断られるか、アポイントメントを取れても当日実現することができなかった。彼らが同性愛に関する自身のストーリーを話すことが直接死につながるような出身地からやってくるという事実は、たとえフランスにいても変わらない。彼らの中にはフランスについて数ヶ月たっても同性愛者であることを自分の口から語りたがらないものもいる。話をすること自体が彼らにとってどれくらいの負荷のかかることなのか、常に敏感でなければならない状態で、いかに調査の趣旨を説明して理解してもらい、関係性を壊すことなく調査を受け入れてもらうかは最後まで課題であった。

さらに、ライフストーリー手法が難民申請の中にある面接と似たような形を取っていることも調査を進めていく上では障壁となった。上の4人のうち、3人は難民申請を経験しており、3人とも一度目の OFPRA への申請は却下されている。彼らによれば、話題にすることもできない場所で申請理由とその証明が「十分」な状態でフランスにくる人はほとんどいない。申請のための面談で難民局の職員に話す彼らのストーリーが、「フランスの方法で」聞いてもらえること、信じてもらえることは非常に珍しいのだという。このようなことを経験している彼らにとって、もう一度同じ行為を繰り返すことが重荷となる、またはそれを恐れているメンバーもいるように感じた。

言語の問題もいくつかあった。今回の調査では協力してくれる人の希望する言語で聞き取りを行うこととしていた。しかし想定していなかったことに、調査をお願いした人の中にはフランス語でしたいと希望してくるものがいた。彼らなりのフランス社会への統合の仕方なのかもしれないが、自分にとって最も自信のある言語で話すよりも、フランス語で自分のストーリーを語りたいたいのだという気持ちを頑なに示された。しかしフランス語で話すと「まだ準備ができていないからもう少し待ってほしい」とも言われ結果的には調査が実現されることはなかった。通訳が同席することによってためらいを感じたのかもしれないし、これが彼らなりの断り方だったのかもしれない。もちろん逆のパターンもあり、この言語で話したいという希望を受けたもののこちらが通訳を見つけることができなかった例もある。

7. 考察

このようにして調査は進み、様々な語りを聞くことができた。そこからそれぞれのテーマに振り分け考察をしていきたいところだが、字数の制約もあるので今回は一点に絞ることにする。私にとって常に最大の疑問は、なぜこの数年でパリにやってくる LGBT 難民申請者が急増しているのかということである。ARDHIS がこれまでに受け入れてきた申請者と



これに関しては例えば、2009年にウガンダ政府が発案した「反同性愛法案」を発端にアフリカ諸国に広まった「ホモフォビアの波 (Thoreson, 2014)」との関連性を挙げる事ができるかもしれない。しかし、もしそれが直接的な原因なのであれば増加の初口がもう少し早くに現れていてもおかしくない。また UNHCR は難民に関するガイドラインの中で 2008年に初めて SOGI について触れており、2012年にも改めてガイドラインを出している。この働きかけが功を奏し、今まで却下されていた申請が通り始めたということも考えられる。しかしこれはあくまで結果論であって ARDHIS が受け入れをする申請者の多くは申請中か上告中のもの、つまりすでにフランスには渡ってきていた者たちである。

ここからは実際の語りを見ながら LGBT が申請理由として急増している理由についての考察をしていきたい。まず A の語りからは、出身地とヨーロッパ諸国の間にある「LGBT」をめぐる相互作用が見えてくる。

Je savais parce que moi c'est le Portugal qu'il était le dernier pays qui avait accordé ça. Oui, donc le Portugal ils ont accepté ça. Là, tous les imams euh tous les imams, les maitres coraniques de la Guinée, de [village], ils ont fait une manifestation contre ça. Ils ont dit que maintenant c'est la fin du monde. Comme un, même le Portugal maintenant ils ont accordé le mariage entre les homosexuels. Donc c'est la fin du monde. C'est un signe qui fait partir de la fin du monde. Donc les, moi c'est comme ça que je sais que la France donc ils acceptent ça parce qu'ils ont dit que c'est e Portugal qui est le dernier pays. (...) Ils parlent ça dans les *Makkas* [Mecque], dans les media, dans les télévisions, dans les radios pour sensibiliser euh la population guinéenne pour le ne pas s'intéressé le Portugal. (...) Comme y'avait beaucoup de guinéen qui sont, qui vivent au Portugal, donc c'est pour cela, une fois le Portugal ils ont accepté la loi donc les guinéens avaient peur que les guinéens soient des gaies. Donc c'est pour cela, ils parlent de ça dans les médias. Moi c'est comme ça j'ai su ça. [知ってた、僕はポルトガルがそれ（同性婚）を認定したということ。そう、だからポルトガルが認定した。その時ギニアの、[村]のイマームが、全てのコーランの先生がそれに反対する運動をした。今は世界の終わりだといった。ポルトガルでさえ同性愛者同士の結婚を許したんだ。それは世界の終わりだと。世界が終わり始める印なのだと。それで、フランスがそれを認めていることを知った。だってポルトガルが最後の国だと言っていたから。(…) それ（世界が終わるという話）はメッカ、メディア、テレビ、ラジオで話されて、ギニアの国民が興味を持たないようにするために。(…) ポルトガルに住んでいるギニア人もいるから、ポルトガルが合法化したらギニア人はゲイになってしまうと怖がった。それだから、メディアで彼らは話すんだ。僕はそうやって知った。]

(A, 2019/8/19)

出身地で同性愛嫌悪の感情を市民の間に植え付ける上で最も役割を果たしているのはムスリムのリーダーたちである。そして彼らが「世界の終わり」と話す場所は、Aにとってはむしろ生き残るための場所となった。つまり一方で受け入れが進んでいるその状況こそが、直接的に彼らの出身地における迫害の要因ともなりうるということである。Bが「同性愛者 ‘borom-ñaar-i-tux’⁸」という言葉を生で初めて知ったのは、コーランの先生が同性愛は罪であるという説教をしていたモスクだったという。このように彼らは支配文化で支持される同性愛嫌悪の言説を逆手にとり、自分が何者であるかを知るための知識に変え、後に出身地を離れなければならないという状況に立たされた時にそれを活かして移動を実現した。

もしもヨーロッパで合法化されていく同性婚のニュースや、同性愛者が国を離れ難民としてヨーロッパに向かっているニュースにムスリムのリーダーたちが反応していなかったとしたらどうなっていたのだろうか。もちろんインターネットは非常に重要な役割を果たしている。Aは友人の携帯を目を盗んでトイレに持っていき、ゲイポルノを見ては自分もそうであることを確認していたという。そのようにしていずれ同じ情報を手に入れていたかもしれない。しかし支配文化に包摂された彼らだからこそ手に入れられた情報があったということは事実である。

Bにとってはこのインターネットで手にいれた情報が実際にフランスで役立っていた。彼はフランスについての当初、マレ地区⁹を知らなかった。しかし虹色の旗の意味は知っていた。セネガルではもちろん虹の旗をみることなどないというが、インターネットですでに「沢山の色の旗 ‘les drapeaux avec les multi-couleurs’」については知っており、そのためにもたまたまマレ地区を通った時にゲイバーにたどり着くことができた。

Il a dit en fait, lui, il savait pas. C’est juste il a connu par hasard. Il a passé au Marais, donc il a vu des, partout des bars, il y’avait des drapeaux, et euh des LGBTs donc c’est par là, il a su qu’il voyait que des garçons, il voyait des couples hétéros, c’est par là, qu’il a appris que c’étaient des bars gais. Après il a commencé à fréquenter petit à petit. (...) Parce que lui il passait hasardement il le connaissait donc, arrivé au Marais, il voyait que tous les bars avaient les mêmes drapeaux, donc il a su que les drapeaux avec les multi-couleurs, donc c’est le drapeau des LGBTs. Donc c’est par là qu’il a appris que, comment dire, c’étaient des bars gais. [彼は（マレ地区について）知らなかった。偶然知った。マレ地区を通った時に、そこら中にバーがあって、LGBTの旗があった。その時、男の子しかなくて、異性愛者のカップルがいなくて、その時、ゲイバーだということを知った。その後少しずつ通うようになった。（…）マレ地区について偶然知ったから、どのバーにも同じ旗があって、沢山の色の旗で、それはLGBTの旗があっ

た。それでゲイバーだということを知った。]

(B, 2019/8/12)

彼は当時、一度目の難民申請をしたばかりであったものの、ARDHIS やアフリカの虹、Centre LGBT については知らなかった。しかし偶然マレ地区を、そしてゲイバーを見つけたように偶然は続く。そこで知り合い、のちに恋人となったフランス人男性が彼の状況を聞いて ARDHIS に行くように助言したのだ。彼自身は ARDHIS に直接関わったことはないそうだが、市民団体の存在は知っていた。このようにして ARDHIS へ、そして LGBT 難民支援に行き着くものがいた。ここまで見ていくと、LGBT 難民の急増の一つ目の要因の他にも、ARDHIS の知名度とともに支援にたどり着くことができるものが増えているとも考えられる。C が ARDHIS を初めて知ったのは、LGBT 難民支援とは異なる市民団体でのことだった。

Dès qu'il est arrivé à la gare, il a demandé avec des noirs, africains, comme les a demandé, il est venu juste arrivé, donc il ne connaissait personne donc, il voulait demander l'asile. Après on l'a expliqué d'aller à la porte de La Chapelle. Parce qu'ici d'habiter en France, les gens, les nouveaux arrivants, ils partent à la porte de La Chapelle. Ils faisant l'accueil, donc on nous laisse le manger, après on prend un rendez-vous à la préfecture pour le loger. Donc comme ça. Après le monsieur il l'a donné l'adresse pour aller à la porte de La Chapelle. Il est parti à la porte de La Chapelle pour faire l'accueil. C'est là-bas qu'on l'a plus. (...) Il a dit que y'avait une association qui se trouve au métro quatre à Denfert, c'est euh, y'a beaucoup de monde qui se rencontrent là-bas. C'est là-bas qu'on l'a parlé, ça qu'on parlait son problème, pourquoi il est quitté au pays, son pays, après lui il l'a dit à l'autre, lui il est gai parce que pour cela, il est quitté en Guinée, après il l'a demandé à partir à l'ARDHIS. Comme il connaissait pas, le monsieur il a pris un Bic, il a écrit l'adresse complet. Après il est parti avec l'adresse. Il a demandé aux gens jusqu'à trouver le bureau, euh LGBTs. C'est comme ça. C'est l'ARDHIS qu'il a connu. Après E c'est son bénévole, après E il l'a dit à partir à l'Afrique Arc-en-Ciel là-bas. C'est une seule association uniquement pour les africains. [(東) 駅についたらまず黒人、アフリカ人に尋ねた。到着したばかりで誰も知らなかったから、アジールを聞こうとした。そしたらポルト・デュ・ラ・シャペルに行くように説明された。フランスに住むというとき、着いたばかりの人はポルト・デュ・ラ・シャペルに行くから。そこでは受け入れ[accueil]をしていて、食べ物をくれて、県庁で住む(場所を探す)ためのアポイントメントを取ってくれる。こんな感じで。そのあと(駅で話しかけた)男性がポルト・デュ・ラ・シャペルの住所をくれた。支援[accueil]のために彼はそこに向かった。そこが一番(支援が)あるから。(…)それでドンフェール駅にある市民団体を教えてくれて、そこではいろんな人に会える。そこで、どうして国を出たのかと彼の問題を話

して。それで彼はゲイだからそれでギニアを離れたと話したら、ARDHIS に行くように言われた。知らなかったら、(市民団体の) 男性はペンをとって住所を書いてくれた。その住所をもとに彼は向かった。LGBT の事務所 (Centre LGBT) にたどり着くまで人に聞きながら。こんな感じで。その人は ARDHIS を知っていた。そのあと E は彼の担当で、E はアフリカの虹を教えてくれた。アフリカ人のためだけの団体だから。]

(C, 2019/9/30)

彼らの語りからわかるのは、決して全ての行動が調和のとれた想像通りの結果のために行なわれていたわけではないということだ。むしろ彼らの日常実践のつぎはぎがうまく繋がった瞬間に戦術として現れてくる、まさに「ブリコラージュ的戦術 (小田, 1997)」である。そして LGBT 難民申請者のための支援体制が十分ではないといえ整いつつある環境が、その繋ぎやすさを支えているのではないだろうか。例えばマレ地区にいた男性や、他の市民団体に活動していた人。A であれば難民申請のための健康診断で担当した医師が ARDHIS を紹介してくれたという。このような彼らの日常の中に散りばめられたキーとなるような人物との遭遇や出来事をつなぎ合わせる能力こそが、戦術と呼べるようなものであり、これによって彼らは同性愛者として生き続けるという新たな道を開拓していた。

8. 今後の研究への展望

LGBT 難民の急増に対する支援をめぐる現状について切り拓いて言えば、問題がない、あるいは万全な体制が整っているとは依然言い難い。問題点としてあげられるのは例えば ARDHIS において見られた申請者とボランティアの不均等な数であり、またそれは申請で職員に話すストーリーを判断する基準の曖昧さである。しかしその不十分さは、難民らによる戦術によってある意味で補われているとも言えるような現実があることが今回の調査で見えてきた。前述したように、ヨーロッパと LGBT 難民らの出身地の間には、「LGBT」という名の下に格差が広がりつつある。一方ヨーロッパの国では同性婚が合法化され、他方出身国では同性愛者であるということによって殺される。この事実を単に後者への批判で解決しようとするのは間違っている。むしろこの国家間の差異は、相互作用的に、呼応し合いながらつくられているのではないか。そして、「LGBT」に各々が意味を付与し、それをもとに国家の価値を作り出そうとしている権力の結果である。そのような支配文化が彼らを「黒人 LGBT」として存在させている。

彼らを包摂する「支配文化」とは、単に特定の国家のものを指したものではない。「LGBT」は確かに国家的な権力、政治的な意図、文化的な文脈のもとに、異なる形でそれぞれの国家のなかで形成されていくものである。しかし「SOGI の社会的・文化的な差異への視線」はそのような特定の領域を超えることを可能にし、これによって彼らの持つクィアネス

(queer-ness) は立ち現れる。抵抗はどこに向かっているのか。この抵抗によって形成される紐帯が繋ぎ止めているものたちとは一体誰のことなのか。「支配文化」に向かう闘争は一体何を要求しているのか。今後も引き続きこの点に着目して研究を進めていきたい。

注

1. 「LGBT」という言葉をあえてここで用いる理由は、それが「支配文化」に包摂された彼らの今の立場であることを表すためである。対して国家等で共有された固有の言葉としてではなく、特定の定義を持たず、その抽象性こそが論点となるような場合にはクィア、およびクィアネスを用いる。
2. アフリカの虹の活動理念でもあり、毎回集会の始まりに問いかけられるものでもある。
3. 移民と一時滞在中の同性愛者およびトランスジェンダーの権利啓発のための市民団体
4. Middle-East and North Africa の頭文字をとったもの。イスラーム教圏、アラビア語圏として総称されることが多い。
5. LGBTI の国際的連帯（‘Solidarité International’）
6. 母親がセネガル人、父親がギニア人のため二重国籍を持つ。
7. OFPRA（Office Français de Protection des Réfugiés et Apatrides / フランス難民・無国籍者保護局）への一度目の申請は証拠不十分として却下され、現在は CNDA（Cour National du Droit d’Asile/ 庇護権全国裁判所）の弁護士とともに上告（recour）のための準備期間にいることを意味する。
8. セネガルの民族言語ウォロフ語で「同性愛者」に対応する言葉。〈borom 持っている ñaar 二つ i の tux 名前〉、つまり男と女の側面を持つという意味で、同性愛者を指す。しかし、当事者がアイデンティティとして用いるというよりは、差別的な場面で用いられる。ウォロフ語では他に 〈gôor-jigëen〉、直訳すれば「男女」という言葉も用いられることが多い。
9. パリ市内にあるいわゆる LGBT エリアである。東京で言えば新宿二丁目がそれに当たる。バーやクラブ、雑貨店など LGBT に向けられた店舗がいくつも集まっている。

参考文献

- ARDHIS (2019), “Rapport d’activité”.
- Binnie, Jon and Valentine, Gill (1999), “Geography of Sexuality: a review of progress.” *Progress in Human Geography*. 23.2: pp.175-187.
- Kaytal, Sonia (2002), “Exporting identity.” *Journal of Law and Feminism*. 14: pp.97-176.
- Lewis, Nathaniel McAllister (2014), “Moving ‘Out’, Moving On: Gay Men’s Migrations through the Life Course.” *Annals of the Association of American Geographers*. 104.2: pp.225-233.
- Luibheid, Eithne (2008), “Queer/Migration: An Unruly Body of Scholarship.” *GLQ: A Journal of*

Lesbian and Gay Studies. 14: pp.169-190.

Thoreson, Ryan Richard (2014), “Troubling the waters of a ‘wave of homophobia’: Political economies of anti-queer animus in sub-Saharan Africa.” *Sexualities*. 17: pp.23-42.

ジュディス・バトラー（2018年）佐藤嘉幸、清水知子訳『アセンブリー—行為遂行性・複数性・政治』青土社

工藤春子（2014年）「難民保護におけるホモセクシュアリティ概念の採用：ゲイとレズビアン難民によるナラティブ構築の事例から」*Gender and sexuality: Journal of Center for Gender Studies ICU* 9: 63-89

ミシェル・ド・セルトー（1987年）山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社
小田亮（1997年）「ポストモダン人類学の代価：ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」*国立民族学博物館研究報告* 21(4): 807-875

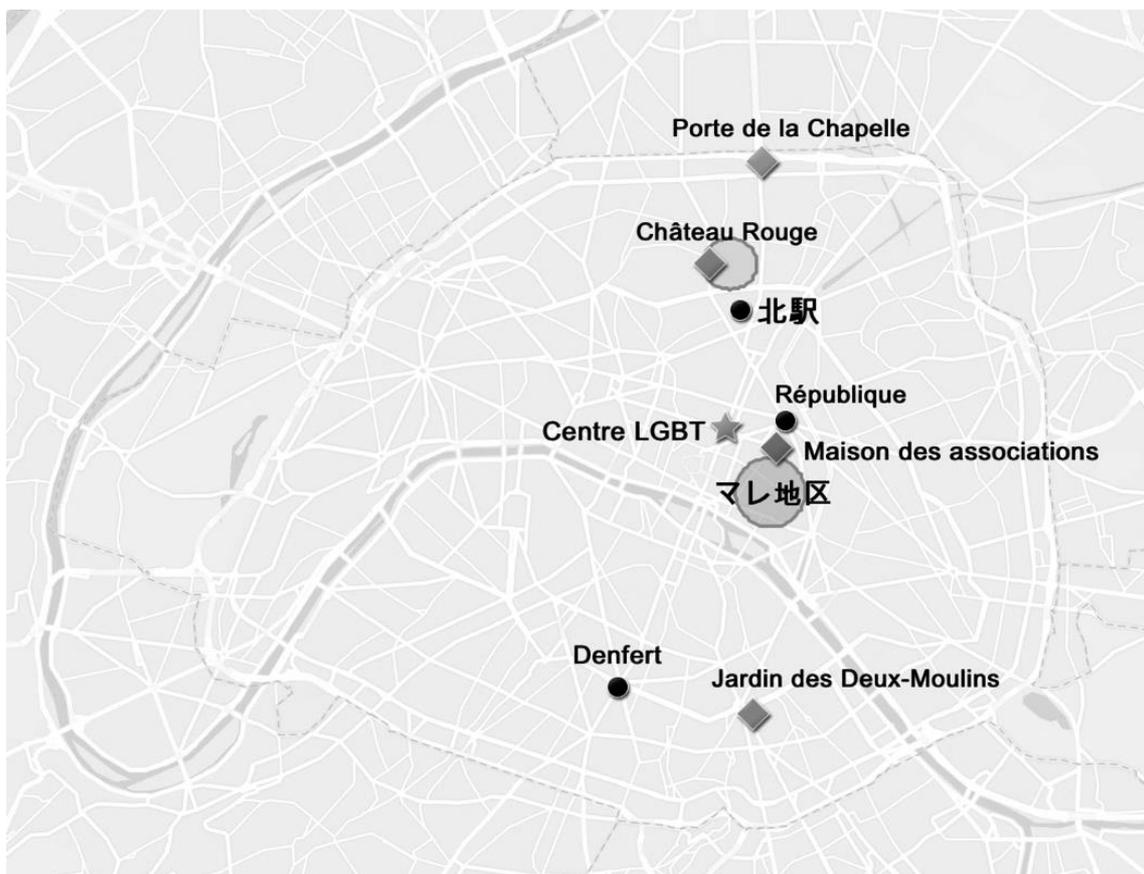


図1 パリ市内の地図